

## 問題解決学習を試みて

名 古 宏 樹

現在、過渡的な段階にある社会科教育を、教育実習という実践を通じて経験した事は、社会科教師を志す一学徒として実に意義深いものがある。この紙面を借りて私が、その経験の場である如何に実践し、如何に感じ、現在如何に反省しているか述べさせていたところ。

先ず、如何に実践したか。大学に於て経験が多入に基ずく社会科教育を、一応理論的には把握していた。しかし実践に際しては其の理論の再構成の必要性にせまられた。小学校五年生を担当するには、五年生に關する教育的知識が余りにも無い。そこで実践の場において、実践を通じてそれを把握して行こうと結論した。「問題解決学習」と一口に言つても、何卒どのようなにして解決させるのか解らない。それに因して、私は次のよう

に考へた。問題解決は目標であつて、目的ではない。即ち問題を解決しようとする情熱と意欲こそその畢竟をなし、問題解決への過程こそが最も大きな意味を帯つたものではなからうか。以上の考へに沿つて私は実践していった。小さな問題でも参考書として社会科地図、年鑑、教科書、その他の文献を教室内で利用させ、解決の方向に子供達を引っぱつていった。小さな問題解決の喜びが、次の問題解決への意欲となりて子供達の主体に取られる。頃合を見て私が、「何うしてだらうか」「何故そうなのか」といふ設問によつて、大きな問題へと導入して行く。うまく乗つてくる事もある。しかしそうでない時の方が多かつた。次の時間には、前の時間の評価に基ずいて進めて行く。しかし決して問題解決の線はこわさなかつた。

概略ではあるが、このような実践を通じて感じたことは、「問題解決学習」としての社会科教育の線が、児童の主体に於て壊れている。又それには社会科教師の責任もあるが、これが民主的なる意味の社会科教育への反動の一つの表われであろう。

即ち、問題解決学習は単に社会科教育のみの問題ではないからである。問題解決学習が単に教室内だけで終つてはいけなからである。ある問題に現象を提起し、その解決に向つて実践して行く児童の養成こそ、実に社会科教育の目標であるといつて良いであらう。このような大きな目標達成のためには、単に教師の力だけではなく、父兄の助成、社会の暖かい目があつて始めて養われて行くものだと思う。現実にははたしてどうなるであらうか。児童が一冊の参考書否教科書を借るにも、父兄のフトコロからその費が出ているのである。まだ買入れは

良い方である。一冊の参考書も手にする事のできない児童が、一学期的の三分の二を占める現状である。こゝに於て私のとつた問題解決の技術的な面が、一つの大きな障壁に突当つてゐる事が解る。現在の教育施設では完全なもの望めない。ましてや教育予算という、未来においてそれは望めずでは無い、児童に於いては充分に満たされてはじめて真の問題解決学習が可能である。飢えた児童に何が望めよう、そこにはたゞ飢を満たす要求だけである。これは児童の責任ではない。その飢を如何に解決してやるか、実にこれは大人の責任であり、肩政者の責任であろうと思う。政治的中立というあいまいな言葉にあやつられ、教科書と唯一の参考書とし、学習指導要領に基づけば、それで教育的(問題解決学習を含む)であると考える教師が居る止するならば、それは大きな誤りである。

私達生徒もこゝで、教育そのものについてもう一度考察してみらる必要があるのではないだろうか。教育は単なる一人の肩政者のためのものではない。実に我々国民一人一人のものである。故に我々は、教育に充分なるものを望んでも望みすぎるといふことはなからう。

問題解決学習は教育的効果がない。又、危険な教育であるとする見方は、実に教育を愚弄するものである。我が国に於て単に十来年の歴史を待つこの学習に、たゞこれだけのことで終止前を打つことは、教育そのものの、危険である。教育は国家百年の計に於て行われるべきであるというのが通念である。

この問題解決学習に於て、教育施設の不備と教育予算不足を暴露するものであるから、そこに煙幕を張らんとして反動的な

教科学習を、それも教育を知らぬ政府がやるうとするのである。我々はまた、問題解決学習をあきらめてはいけぬ、若し我々の先輩達が、これをあきらめようとするなら、我々はその無責任な非教育的態度を批判せざるを得ない。このようにな上からの反動的圧力を、国民の意志ではね返さなければいけない。これを許す事は、教育の場で教師は単なる「もの云う機械」となり、ロボットとなりはて、そこには、真の教育はないであろう。問題解決学習に欠点があるなら、当然実践看たる教師の側から、不満が出る筈である。

私が経験したように、この学習は教育行政の怠慢こそ暴露するが、この学習そのものには問題点はないと思つた。一つの非難として、系統性に欠けるといふものがあるが、この学習こそ問題解決という系統だつた、実に教育的なるものが含まれていると感じられた。

このように、実践の場で障壁に突当つた時、教師たるものは自分の力では、どうにもそれが解決できない、あきらめざるを得ないのが現状である。

しかし、これは決して許されてはならない事である。児童のためにも、未来の教育のためにも立ち上つて、このような教育施設の不備と、教育予算の不足を叫び、少しでも改善の方向にもつていかねばならないと思ふ。

